

個が生きる図画工作科の授業の評価

増村光恭

1. 個が生きる授業の評価

(1) 造形活動と評価

造形活動における評価とは、一人一人の児童が抱く思いを大切に、活動全般をまるごと評価していくことで、児童の成長を助けていくことである。その方法としては、自己を見つめる自己評価力の育成や、集団とのかかわりの中での自己認識をすすめていくことが大切であると考え。授業の場面では、個々の成長を助ける要素がたくさんある。とりわけ材料とのかかわりにおいての「このようにしたい。」から「こうしたんだよ。この方がいいと思ったんだよ。」等の発言は、児童の成長をしっかりと表しているものである。このことは個々の考えや思いが変化していくことを自覚し語れることこそがその子どもにとって最適の評価であることのあらわれであると考え。

(2) 造形遊びの評価

造形遊びにおける評価にとって大切なこととは何であろうか。それは、前述したように自分の活動の自覚であろう。思いや感性が変わっていくことの体感が重要であると考え。個々の活動の変遷を楽しく自分の思いを軸に語られるような活動こそ、評価そのものであると考え。以上のように活動の展開の足跡を追う中で、大切にされたことは、個の内面での思いの変化が伝わって来るようなかかわりを児童と持てることだと考え実践を進めてきた。

2. 実践例 「はりがねと遊ぼう」3年生

(1) 実践にあたって

造形遊びは「ものよりこと」と言われる。結果としての作品やものより、子どもたちが何を考えどうしたかということが重要であるということを示した言葉である。それでは、授業の評価を進めていくときの指導者側の評価はどうあるのが望ましいのであろうか。個々の内面に触れることのできる評価、活動展開でのアイデアや活動のいろいろをどのように効果的にとらえ、指導に役立て個が生きることにつながるような「生きて働く評価」になるのだろうか。

材料をもとにした造形遊びの授業の評価をどの様にすすめていくかを以下のように分類した。

評価の対象から	評価の実際
①題材について	題材の発展性、題材の条件
②授業について・授業構成について	出合の場、高まりの場、見つめる場
③児童の活動について	活動記録、児童の意識調査

実践を進める上で、以下の仮説をたて、授業構想を進めた。

仮説

- ア. 授業過程の中での評価の場を、児童が主体的に行える場を設定したならば、児童は自己認識、自己評価力を高めていくことができるであろう。
- イ. 授業全体での個に焦点をあてた評価の場を設定し、個々の活動記録や感想などの思いを汲み上げることをすれば、児童の自己認識力を高めることができるであろう。

これらの評価の場を設定するために、具体的に以下のような点を重視した。

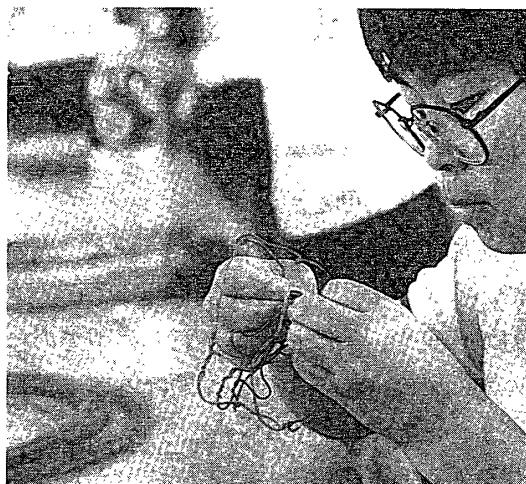
*個が生きる授業の条件として

出合いの場を大切に。時間的量的に十分なものを設定する。

児童相互のかかわりを大切にする。

***学習過程の中に**

友達の作品を見て回る場を設定する。 (仮説 ア)
授業の終末に、感想や問題点、次時への課題
などを記述することを位置づける。 (仮説 イ)
以上の方策に基づき授業設計を行った。



(2) 実践の概要

①指導計画

学 年 第3学年

題材名 「はりがねと遊ぼう」

題材について

本題材の材料である針金は、自由な形をつくりだすのに適している材料である。その形の可変性は、針金の太さや材質によるが、曲げる・切断等が児童の発達段階に適したものであれば、加工等での抵抗も少なくなる。変形することを楽しみながら、平面的な形のおもしろさから、立体へと変化させることができ、造形活動への意欲喚起も自然な形で行える題材である。

本学級の児童は、材料を手に取りそこから発想することに関していえば、造形遊びを続けてきているので、発想の幅広さについては期待できると考える。また、他の身の回りにある材料と組み合わせての造形活動の経験もあり、材料をどの様に生かしていくか興味深い点がある。

本題材では針金の扱い(切断・曲げる・つなぐ)を全体で習得した後、自由に作り始めさせた。他の材料の利用については、個々に応じた助言を与え、指導者は、接着剤や作品の下に敷く厚紙の用意などの援助を行い、発想に基づく活動や、グループ編成等は児童にまかせた。

指導目標

1. はりがねをつかった造形活動にひたらせることにより、造形遊びの楽しさを味わわせる。
2. 材料に進んで働きかけ、自分なりの多様な試みをさせる。
3. 自分や友達の工夫・発想の良さに気づき互いに認め合う態度を養う。

指導内容と計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・6時間(本時 第一次 第1時)

第一次	はりがねとの出合の場	2時間
第二次	はりがねと他の材料を組み合わせて作る	3時間
第三次	友達の作品を鑑賞する	1時間

授業設計の焦点

造形遊びでは、子どもたちが材料の特質を探りながら、それぞれの思いをもって、材料に進んで働きかけていくことが大切となってくる。そこで以下の点に留意して、授業を設計した。

○材料との出会いの場(ふれ合いの場)

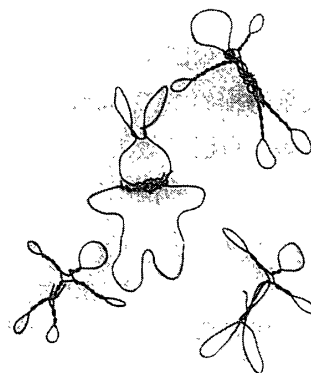
- ・材料は児童の主体的な造形活動を喚起するのに十分な魅力を持ち合わせているか。
- ・針金に対して、どこまで児童の形を変える工夫や、特質を生かした造形活動ができるだろうか。

○広がり場

- ・他の材料と組み合わせることにより、どのような発想の広がりや、活動の多様性が生まれるであろうか。

○評価・鑑賞の場

- ・個々の活動に対する思いを汲み上げられる造形活動カードの活用




(材料や、用具に対する要望。指導者の助力要請など。)

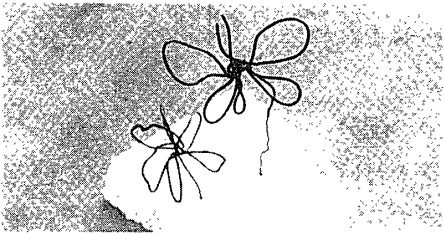
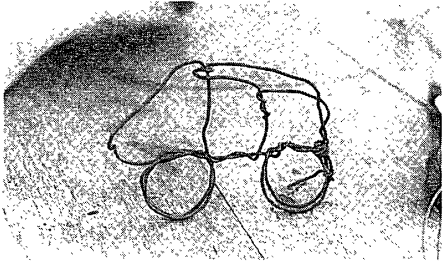
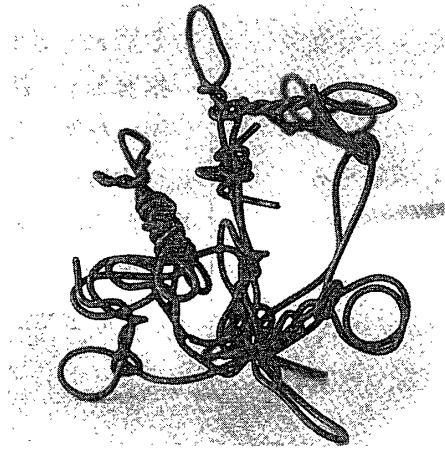
- ・ 友達の作品に対する励ましや、良さを認める場 (ミニ展覧会・単位時間の中に設定) をどの様に活用していくか。

評価の観点

造形への意欲・関心・態度	自分の思い付いた造形活動を楽しんでいる。
発想や構想の能力	新しい思い付きや試みをしようとしている。
創造的な技能	材料の特質を生かし、工夫しようとしている。
鑑賞の能力	工夫や努力、発想の良さを共感しようとしている。

指導の流れ (第一次より第三次まで)

学 習 過 程	指 導 の 上 の 留 意 点	児 童 の 反 応 ・ 評 価 の 観 点
1. 材料との出会いの場 用具の使い方	1. はりがねについて、その性質や使う用具について知らせるために以下のことを行わせる。 ・ グループでの針金の配分 ・ 乾電池や鉛筆に巻き付ける ・ 用具を使ってまげてみる T 「いろんなことができそうだね」「じゃあやってみようか。」	◎針金を使った経験の有無 ペンチを使った経験の有無 (事前調査・予告を兼ねて) 針金を使ったことがある。12/8人 ペンチの使用 ある 8人/38人 ・ グループに配られた針金の配分で用具の使い方を確認している。 ・ ラジオペンチとペンチを区別して覚える。 ・ 名前をつくる。(線材として) ・ 輪にする。(指輪や顔)
2. 活動する	2. 必要な物(厚紙, 板, 針金等)を用意し, 個々の活動を支える。	2. 活動は活発であるが, 形としてではなく, さわって楽しむ子や, 曲げること熱中している者が多い。
3. ミニ展覧会	3. 教室を一巡する形で鑑賞させる。指導者も一緒に見てまわり個々の思いを汲み取る。	3. スゴイという言葉が多く聞かれた。「まねをしてみたくなった。」と感想に書いていた。
4. 活動する	4. つくろうとするものをはっきりさせるために必要な材料や, 迷っていることを感想カードにメモする。	4. 針金だけでなく, 図工室にある他
		<p>〈感想より〉・はりがね一本でいろいろなものが作れる。・はじめは, いろいろな長さに切って使っていたけど, 続けてできるようになった。・〇〇さんはすごいなと思ったけれど自分もできてうれしかった。・今日はいろいろ作りたいものがたくさんありました。ミニ展覧会の時, 〇〇君がいいのをしていたので作ってみようと思いました。</p>
5. 自己評価をする	5. 感想カードで自己評価をする。次時の予定も書き加える。	の材料を必要としていた児童が多くその場で配り始めた。

<p>1. アイデアの紹介</p> <p>2. 他の補助用具を使って</p> <p>3. 他の材料を使った活動</p>	<p>1. 前時の予定から、他の材料を使うアイデアと、人形を作って組み合わせる例を紹介する。</p> <p>2. 乾電池や、スチロールを用意する但し、数は十分ではないようにする</p> <p>3. 他の材料を接着したい場合や、形を変えるための相談にのる形で、指導した。</p>  <p>4. ミニ=展覧会</p> <p>4. 休憩をはさんで、実施した。個々の活動のペースに合わせてるように、配慮する。</p>	<p>他の材料をたくさん持ってきている児童もあるが、この前の続きだからと、針金のみで活動する児童が半分いた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・捻って作るぐにゃぐにゃ人形が、全員に浸透する。 <p>3. 指導者に頼らず活動を続ける児童が多い。形を変えたのに元に戻るから、太い針金を要求する児童も現れた。自由に取れるようにした。</p>  <p>4. グループで作ろうとする動きが出てきて、活動の分担や、全体について話し合う姿が見られた。</p>
<p>1. 活動する。</p> <p>2. 用具の使い方について確認する</p> <p>3. 工夫の紹介</p> <p>4. 自己評価をする</p>	<p>1. 材料の交換等、友達と作ることも認めていく。</p> <p>2. 安全確認を行い、用具が机に整然と並んでいるように指導した。</p> <p>3. グループごとに、活動の見通しや工夫した所を聞いて思いをはっきりさせた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動記録をとる。 ・作品の下に厚紙等を敷かせる。 <p>4. 以下の点から活動を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・意欲は持続したか。 ・アイデアや工夫はたくさん思い付いたか。 ・授業感想や要望など。 	 <ul style="list-style-type: none"> ・意欲は高く、次々と思いついた活動をしている児童が多かった。 ・友達と話しながら記述していた。 ・製作時間の不足を言う児童が多い
<p>1. 作品の鑑賞会をする</p>	<p>1. 作品を机の上に置いて、児童が見て回る形をとり、鑑賞させる。作品の解説が必要な場合は、本人を呼んでおこなわせた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・完成していない児童は、家庭や休憩時間に仕上げていた。 ・鑑賞の時間の後も、制作を続けていたため、1時間増やす事とした。

(3) 分析

作品の分析

第一次 《ふれあいの場》

計38名		
平面的 机の上や、紙の上に 並べるように 絵、文字、輪、金魚すくいの輪、 虫、ちょう、馬、うさぎ	用具の使い 方で行った作品 パネ、四角	立体的 ボール トンポ 輪車
19人	10人	9人

活動時間 全体で15分、個々の活動25分

第二次(1)

平面作品 他の材料を 使っている	立体(単体) 車 人形 木 虫 ブランコ	立体(組み合わせで) 体操する人、ブランコ、 車に乗る人、ロープウェイ
5人	19人	14人

第二次(2)

◁ミニ展覧会

馬の走る絵 人の顔 おみせや さん	立体(組み合わせで) 人形 ブランコ ロープウェイ	抽象形 元氣玉 鳥かご はり金の はり山
5人	29人	4人

第二次(3)

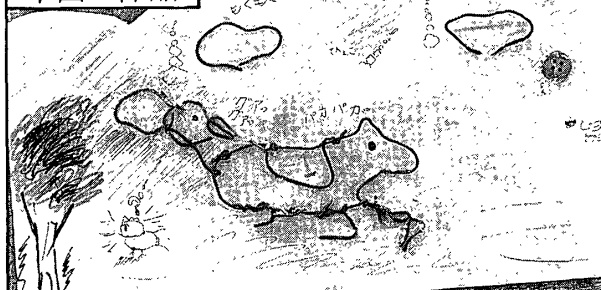
立体の作品 (38人)
ぐにゃぐにゃ人形(26人) モジャモジャボール
動物、コップ、ぼうし、(ドアつき)
はり金のおりもの 自動車 自転車にのる人
たくさんの人、てつぼう サッカーをする人

用具の使用 「ペンチは何のために使いましたか」

第一次

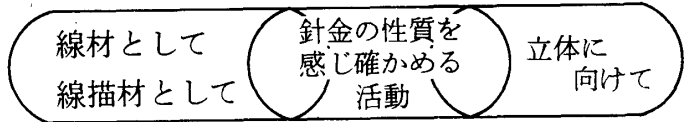
切断のためにのみ	曲げるために	
35人	13人	
切断のみ	曲げるためにも	2本使って
8人	24人	6人

平面の作品

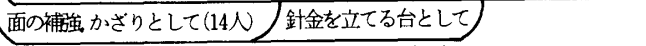
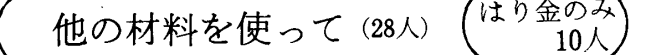
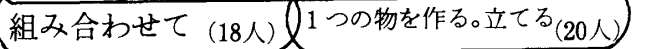
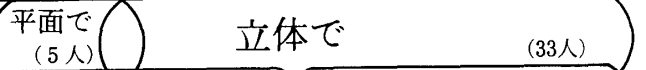


活動の分析

材料とどうかかわるか、(線材として、立体材として、他の材料と)

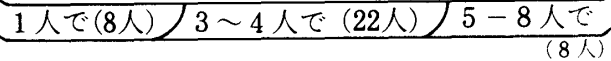
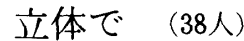


感想より 小さな指輪ができました。金魚すくいのあみがうまくねじれてできた。ペンチではりがねをまげるとまっすぐになります。物にまきつけるのは、とてもおもしろいです。



・他の材料として持って来た物

ひも、毛糸、色紙、ダンボール紙、ビニールテープ、セロファン、スポンジ、スチロール、ペットボトル、

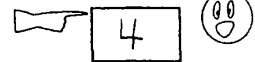


授業感想カード 『はりがねとあじょう』

1. 今日のじゆぎょうについて感じたことを下のA, Bから一つずつ選びなさい。

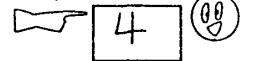
A:やる気について

- 全然やる気がしなかった。
- なんとなくおもしろかったので、次にはやろう。
- おもしろかった。楽しかった。
- 自分でまんどくできるけつかった。次にやることもはつきりしている。



B:アイデア・考えについて

- ぼんやりしてなかなか考えがうかばない。
- いくつかの考えはうかんだが、どれにしようかまよっている。
- つくりながら、自分に考えをたしかめていけそう。
- ごまかい所まで、自分の考えがあらわせた。

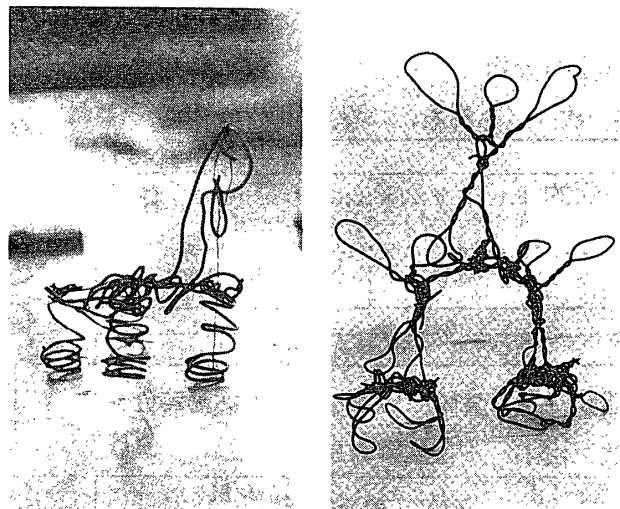


2. べんぎょうしたあとの気持ちを書きなさい。
かんがえたところ・くふうしたところ・発見したこと

うまを作りました。いろいろなどうぶつを作りました。うまがはいているようすをあうわしました。

友だちから、「ひと吉 感想」
いろいろなどうぶつを作ってとてもいいと思うよ!

作品の傾向として、線材料としてのはりがねから、面を生み立体へと変化していく過程が顕著に現れている。他の材料と組み合わせての活動はある程度の所ではりがねのみの表現へと変化し背景や、作品の展示の補助として利用されていた。児童の活動経験も、立体へと変化していく中で、立体の表現を一様に経験しており、その高まりも見られる。活動していく中で育てていく思いが、造形的な高まりとなり広がりを生んでいることを示しているように考える。用具についても、試行する活動を通して習得をはかり思いの実現に役立てていることがわかる。



3. 考察

(1) 仮説. ア について

一単位時間の中での評価の場としてミニ展覧会を位置づけた。授業の終末での感想の中から、これら友達の作品についての記述を右に抽出した。中でも、ミニ展覧会を設定した後の子どもどうしの教え合いや、協力態勢は授業後に書かせた友達への一言という欄でその有効性を確認できた。しかし一方で次のような児童の反応も見られた。いつの間にか隣のグループと材料のやりとりをしている。離れた二つのグループで同じ工夫を一緒に追求している。このことは、子どもたちが自分自分の活動に熱中しながらも、常にまわりの友達の様子を感じ取っていることではないだろうか。このように自然な形で良さに気づく活動をしている児童に活動を止めてまで見て回らせる場を設ける必要はないと感じた場面もあった。見て回ることを欲している児童に対してそのことが行えるよう、熱中している児童には活動を続けられるようにすることも可能な、柔軟な対応が必要であろう。

《友だちから「ひとこと感想」》

○よく考えた。こまかい所までしていた。みせの中にレジとか、人間を入れていた。すごい。

(3人からのひと言)

○まねをしたいはずなのに、くふうをしてよくなかった。

(となりの児童からのひと言)

○人の体のどうたいの所をほめられたのに、まだまだ工夫していた。

○手や足のつくりかたがうまかった。ぼくもまねをしようとしたけれど、できなかった。よくやったね。

○友だちのアイデアと同じくらいにたくさんのアイデアを考えていたね。

○ミニ展覧会の時、ほめられてうれしかったです。

○てんらん会で、みんながすごいとっていたのがよかった。

(2) 仮説. イについて

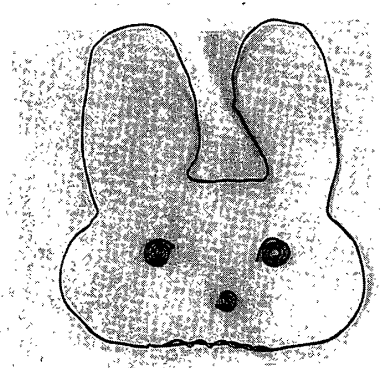
自己評価については、最初の段階での「おもしろい。発見した。」という記述から「ここはこうしたい。こんな材料はありますか。」など造形活動への工夫や見通しに触れた記述が多くみられた。このことは、はりがねという材料が児童の思い付きにあった自由度を持つ材料であったことと同時に、一つずつこれらの思い付きを実現できた状況から導き出されたものとも考えられる。また、記述する中で育っていく評価力もあり、活動や思いが揺り動かされたこと、個々がそれぞれの成長を感じ取れることが可能になって来るのではないかと考える。ただし、時間的な配慮や児童の要求がかなうような状況作りの中で、授業の主体者であることを十分自覚させることも必要となろう。

(3) 一人の児童の活動から

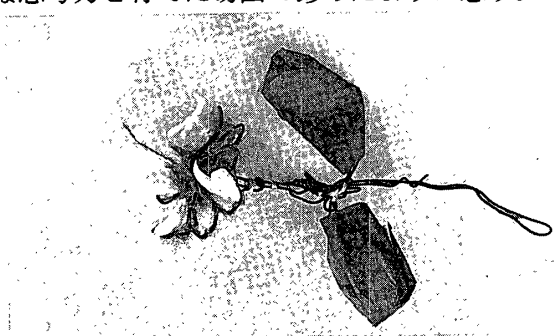
授業全般に渡る個の意識を探る上で抽出児の感想を右に抜粋してみた。最初は、はりがねで絵をかいていたこの児童は、物に巻き付けることからの思い付きで帽子を作りはじめ、毛糸やアルミホイルの材料を使っ

最初ははりがねに何かついたりして作ろうと思っていたけど、はりがねだけで作った方がいいのではりがねで作った。

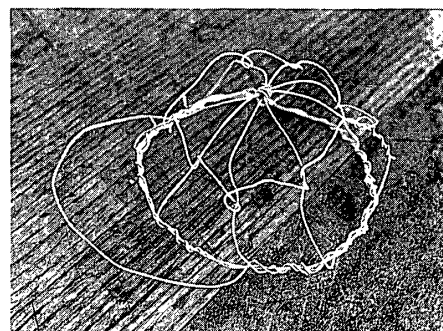
て表現しようとしたが、つなぐことを知る中ではりがねのみで帽子を完成させた。この児童に取っての評価とかかわる場面は、二つあったように思う。一つは、授業の中盤でのミニ展覧会で「すごい。」と帽子をつくらうとすることを認められた場面であった。もう一つは友達作品から、ねじって針金をつなぐことを学んだ場面であろう。自分の思い付きに対して役に立つ友達の良さを自分自身で見つけたことは「試してみる・工夫する・考える」という造形的な思考力を育てた場面であったように思う。



最初の作品



他の材料を使って



帽子

(4) 題材について

造形遊びの活動内容は総合的で未分化で発生的なものであるため、広がり高めまりを持った教材が必要となる。また、材料からの発想から始まる活動であるため多様性を必要とし、児童の発達段階にも適した学年の縦の分化も考えられなければならない。そのような題材の内容や活動展開での価値を見いだしていくため以下のように題材についての吟味を行い実践をすすめた。

- ・遊びという活動の中に造形的なかかわり（造形の芽）があるか。（造形的な価値）
- ・材料は児童の思い付きの瞬発力に対応する速効性があるか。（材料の特質）
- ・材料からの発想を助ける発展性や多様性があるか。（材料から始まる活動の内容）
- ・技法や作品それ自体を目的とせず総合的な観点から題材を教材化したものなのか。

（指導者の題材観）

いずれも今までに述べた活動全てが子どもをまるごと評価することにつながると考えている。本題材に於いては、いずれの項目も達成あるいは、適合していると考えて実践したわけであるが、実践の中で次のようなことが課題として出てきた。①造形遊びの題材は、ある一つの切り口での実践を指すこともあるが、子どもの思いの流れの中で実践していくことも必要である。これは、活動を始めた途端に達成される表現もあるが、今回の実践の様に変わっていくことを楽しんだり克服する中で自己の変容を感じられる題材も大切であると考えたわけである。②授業内容の要素をとらえて教材化すると、作品や技法に目が向き、子どもの変容を大きくとらえることができないこと。分析する際に子どもたちの活動の変化に対応しきれないほどの展開の速さがあったこと。そして、活動の意義づけを指導者の方でする以前に子どもたちがその地点から前進していることを考えるならば、作品は単なる途中経過でしかないことを強く感じた。③子ども達の活動が指導者の予想を超えて発展する場合、本当の意味での寛容な認める姿勢が必要であること。以上の課題は、指導者の評価の方向にかかわるだけでなく、題材を見極めていく際の重要な手がかりになると考えている。

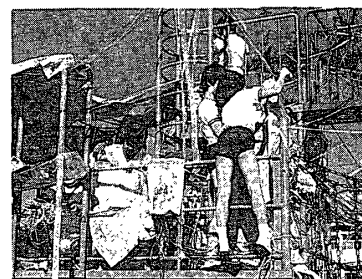
4. 造形遊びについて

本年度に行った3年生の造形遊びの実践を以下に示す。題材開発の観点として①材（題材にかかわる材料）②場（空間も含めた環境）③人（人的環境、児童の発達段階）を中心とした。

題 材 名	材（材料と性質）	活 動 の 内 容	子どもの反応を中心に
3年生 变身！ 「教室が変 身したよ」	荷造りテープ、ひも 自分達の持ち寄った 紐や材料 教室で行った。	教室の机やイス、教 室全体をテープで、 区切って变身させる 「蜘蛛の巣みたい」	天井や窓枠にテープを引っかけ、 楽しそうに活動。自分達の空間を 作って遊ぶ。協力場面が多く生ま れ、遊びが生まれる。
变身！ 「木や枝が 变身」	くぎ、のこぎり、荷造 りテープ（上記使用済 みのもの） 製作時は教室で。	拾ってきた木の枝に 釘をたくさん打って テープを巻き付けて 变身させる。	のこぎりや、金槌の使い方を知る ことを喜ぶ。釘にテープを引っか けるときには、それぞれの児童に 思いが湧いてきていた。
自然の絵の 具箱 「色をみつ けよう」	自然の草、木、土、石 などいろいろなもの。 画用紙、木槌。 屋外で行った。	いろいろなものから いろいろな色を出し 自然の絵の具箱を作 ろう。*自然絵の具	タイヤや、植木鉢、錆などからも 色がとれるこをみつけ大喜び。 薄手の紙に色を出して、切り貼り して絵をつくる。*自然絵と呼ぶ
ターミネ ターがやっ てくる。	新聞紙を使って セロテープ、ひも。 教室で行う。	未来から殺人器械が やってくる。新聞紙 の中は見えないから みんなで隠れよう。	活動を「あと40分でやってくる から」と設定すると、意欲的に活 動。机や椅子を利用したり、体に 巻き付けたり、工夫も多かった。
「針金と遊ぼう」	前述		
ビニール袋 と遊ぼう	集めてきたビニール袋 教室に張り巡らせる紐 セロテープ、はりがね 持ち寄り材料。 大きな空間をとって。	ビニール袋で遊ぶ中 で吊りたい、つなぎ たいという声を大切 にして活動を展開さ せる。	空気を詰め込んだビニール袋の感 触を楽しむ。セロテープによる形 の変化を楽しむ。袋をつないで柱 にして2階の高さにする児童も出 てきて、活動が教室を出て行った



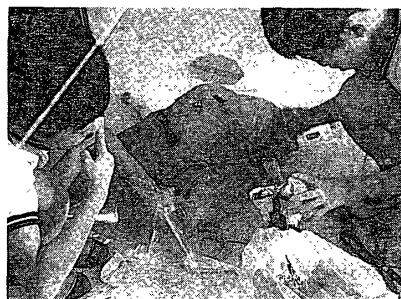
教室のへんしん



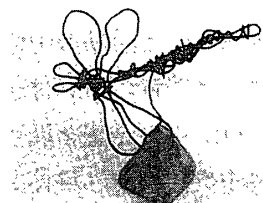
デラックスジムの变身



色をみつけよう



ビニール袋と遊ぼう



5. まとめ

造形活動の評価として今回取り上げた・自分を知る機会としての評価場面・自分自身の思い付きを追求できる自己評価については、その重要性、有効性について確認できたと考える。しかし、これらの手だても指導者の考えた枠を越えて活動する場面や、その形を大きく変えるときについては融通のきくものにしていく必要がある。活動に応じて子どもを丸ごと評価していく評価観、子ども達は、変化し続け成長してるのだという指導観をしっかりと指導者の内面に持つことが大切であると考える。今後も児童の内面と響き合うような評価の形を研究していく必要がある。

最後に、本実践の「針金での造形遊び」を進める上で佐々先生（県指導主事）に多くの指導助言を頂いたことをこの場をかりて感謝したい。

参考文献：花篤實編著『実践図画工作科の授業 第1巻造形遊び』同朋舎出版 5頁～14頁